

# 優秀映画鑑賞推進事業

**池部 良、石原裕次郎、三船敏郎**

個性豊かな男優たちの魅力があふれる作品を紹介いたします。

## 名作映画鑑賞会

**10月14日** (月・祝) 9:30 開場 10:00 上映開始

亀山市文化会館大ホール

入場料(全自由席) 通し券 1,000円 (2本以上3本まで好きな映画をご覧になれます。)  
一回券 500円 (上映作品3本中、いずれか1本をご覧になれます。)

### ① 暁の脱走 [1950年 新東宝] (白黒)

**10:00~11:50** 脚本・監督/谷口千吉  
出演/池部良、山口淑子、小沢栄 他



### ② 嵐を呼ぶ男 [1957年 日活] (カラー)

**12:50~14:31** 原作・脚本・監督/井上梅次  
出演/石原裕次郎、北原三枝、芦川いづみ、金子信雄 他



### ③ 隠し砦の三悪人 [1958年 東映] (白黒)

**14:45~17:03** 脚本・監督・製作/黒澤明  
出演/三船敏郎、上原美佐、藤田進 他



**8月24日(土) 前売開始**

**チケット前売所** 亀山市文化会館、フジヤ、  
亀山エコ案内所、NPO 法人亀山音楽協会 (アイソ研究所)、  
青少年研修センター、(一社) 亀山市観光協会、  
(公財) 鈴鹿市文化振興事業団、鈴鹿ハンター、  
みどり楽器、JA津安芸芸濃支店

主催：(公財) 亀山市地域社会振興会 (亀山市文化会館) / 文化庁 / 国立映画アーカイブ

特別協賛：木下グループ 協力：株式会社オーエムシー

お問い合わせ先：亀山市文化会館 電話 0595-82-7111



木下グループ

# 解 説

## ◆暁の脱走 [1950年 新東宝] (白黒 スタンダード 110分)

### [スタッフ]

原作：田村泰次郎 脚本：黒澤明 脚本・監督：谷口千吉

### [解説]

肉体派文学を提唱し、一世を風靡した田村泰次郎による人気小説「春婦伝」を、監督デビュー3作目の谷口千吉が映画化した戦後反戦映画の代表作。敗戦間近の中国戦線で激しい恋に落ちた上等兵の三上（池部良）と慰問団の歌手・春美（山口淑子）は、敵の捕虜となって送り還されてくる。二人を迎えたのは数々の汚名と上官の嫉妬。軍曹の助けを借り、部隊からの脱走を試みる二人に、残酷な結末が待ち受けていた。谷口と黒澤明が共同で執筆した初稿シナリオは占領軍の検閲官により何度も書き直しを命じられ、難産のうえに完成を見た作品であったが、満洲映画協会のスター「李香蘭」として活躍していた山口をはじめ、中国で捕虜になった谷口、中国戦線に従軍していた池部、田村と、外地での体験を持つスタッフ・キャストの結集により、日本軍の非人道的な階級制度を激しく糾弾する野心作となった。1950年度『キネマ旬報』ベストテン第3位。翌年のカンヌ映画祭へ日本からの正式作品として出品されるとともに、香港および東南アジア諸国に輸出された戦後初の日本映画である。

## ◆『嵐を呼ぶ男』 [1957年 日活] [カラー シネマスコープ 101分]

### [スタッフ]

原作・脚本・監督：井上梅次 脚本：西島大

### [解説]

実兄・石原慎太郎の小説を映画化した『太陽の季節』（1956）でデビューした石原裕次郎は、中平康の『狂った果実』（1956）や田坂具隆の『乳母車』（1956）など、新鋭、ベテラン監督の話題作に出演し、着実にスターの道を歩み始めた。港町を舞台にした『俺は待ってるぜ』（1957、蔵原惟繕監督）では、「ここではないどこか」を求める孤独な青年を、甘い感傷を交えて演じ、自らのイメージをスクリーン上に描き出した。また同名の主題歌もヒットさせ、歌う映画スターとしての出発とした。本作はその裕次郎のイメージを決定的にした記念碑的な作品である。1958年の正月映画として公開され、総配収3億5,600万円（当時の平均入場料62円）を超える大ヒットとなり、1954年に製作を再開した日活にとっても、その後を決定づけた作品である。監督の井上梅次は新東宝からの移籍組だが、裕次郎が指を負傷してドラムを叩くことができず、とっさにマイクを握って歌い始めるというツボを押さえた演出で観客を楽しませ、この一代の大スターの誕生を導き出した。

## ◆隠し砦の三悪人 [1958年 東宝] (白黒 シネマスコープ 138分)

### [スタッフ]

脚本：菊島隆三、小国英雄、橋本忍 脚本・監督・製作：黒澤明

### [解説]

時は戦国時代。隣国との戦いに敗れた秋月家の侍大将＝三船敏郎は、残された姫を擁し、隠しておいた軍用金を掘りだして、敵中突破を図ろうとしていた。同盟国に脱出するためである。二人の百姓を狂言まわしに使い、お家再興にまつわる宝探し、敵中横断にともなう追っかけなどを盛りこんだ作品。襲いかかるさまざまな難関、手に汗握るスリリングな場面が連続する。そのようなシチュエーションをいかに面白く組み立てるかに三人の脚本家、菊島隆三、小国英雄、橋本忍と黒澤明は大いに知恵を絞ったという。観客を決して飽きさせないという決意のようなものもうかがえるシナリオである。この映画が製作された1958年は、映画館入場者数が史上最高の11億2745万人を数えた年である。この時、映画は文字どおり大衆娯楽の王者であり、そしてこの作品は、まさにその記念すべき年にふさわしい作品であった。「キネマ旬報」ベストテン第2位。1959年ベルリン国際映画祭監督賞、国際映画批評家賞を受賞。